

夜空の下、人が行き交う交差点の中で彼を見つけた。それはあまりにも突然で、私は思わず立ち止まる。立ち止まった私に気づかず、肩に当たって居たけれど、そんなことは気にしなかった。

三年前、喧嘩をしてそのまま音信不通になった彼氏の唯織いおりは、あの時と同じように白い長袖のTシャツとジーパンを着ていた。一八〇と身長が周りよりも高いせいで、地味な服装をしていても彼がどこにいるかすぐに分かってしまう。

ずっと彼に、唯織に会いたかった。音信不通になってしまったのは私のせいだとずっと謝りたかった。でも就職や引っ越しが続いてしまい、彼に会うことはおろか、連絡することも出来ずにいた。彼の事を忘れないように、私は唯織から貰った指輪を左人差し指にはめていた。どれだけ辛い出来事が起きたとしても、この指輪があれば大丈夫だと自分を奮い立たせることができた。ペアで買った指輪は、彼の人差し指にもはめられていて、嬉しくなる。

「久しぶり」

雑踏の音が響き渡る中、私は彼に近付いた。なぜか不思議そうに交差点に立ち止まって私たちを囲んでいるビルを眺めていたが、私の声が聞こえた瞬間びっくりしたような顔をしてこちらを見た。

「……佳澄？」かすみ

三年ぶりに聞いた彼が呼ぶ名前に、私は思わず笑みがこぼれる。薄暗い中でも彼のあどけなさが残る顔を覗き込むことができた。うん、と頷くと、彼もまた嬉しそうに久しぶりと言った。

「話したいことがあるんだけどさ」

そう私が切り出すと、彼は何かに気づいたように私の右手を取り、足早に歩き始めた。私達が立っている場所が交差点だということを思い出したのは、信号を渡り切った後だった。そういえばこんな風に優しくリードする感じだったと、少しずつ彼と過ごしていた日々
の感覚が戻ってきた。

「歩きながら話そう」

目の前に広がる住宅街を見ながら唯織は言った。私は歩き始めた彼に追いつこうと歩きながらうんと頷いた。

「私、ずっと唯織に謝りたかったの」

沈黙に耐えられなくなった私は、そう切り出した。

「今もまだここに住んでるの？」

薄い沈黙を破ったのは唯織の方だった。左側に立っている彼の横顔を見つめる。睫が長く、鼻が高かった。目にかかった前髪を見て、彼は少しだけ不器用だったことを思い出す。私はそういうところが好きだったのだ。

「うん。家も三年前と同じままだよ」

「そうなんだ」

彼といるとゆっくりと時間が過ぎていくように感じる。のんびりとした口調で、彼は話す。

「彼女は？ 彼女はできたりしたの？」

言葉にした瞬間、だめだと思った。でもどうしてか聞きたくなってしまった。

「居ないよ」

その言葉に安堵する。一度付き合っていた間柄といっても、三年間音沙汰がなければ別れたのも同然だ。迷いながらも、私は意を決して息を吸う。

「私たちって、またあの時みたいに戻れるかな」

彼と再会したらずっと聞きたかった言葉。でも同時に聞けなかった言葉。彼は「うーん」と唸りながら、一時の沈黙が流れた。その時間は永遠のように感じて、何度彼の横顔を車のライトが照らしたか分からなくなった時、「うん」と小さく呟いた。その言葉は恋人同士に戻ることを意味していた。

それが嬉しくて私は思わず立ち止まる。いつの間にか私の家の前に着いていた。スマホを買い替えた時に連絡先のデータが消えてしまったということで、再度彼のLINEと電話番号を交換し、私達はそこで別れた。

「気を付けてね」

その言葉が彼から聞けるだけで私は嬉しかった。でもどうしてか、あの時のことと指輪について訊ねることはできなかった。

社会人になって、時間というものを初めて意識した。学生の頃はただ時間が許すまで遊んでいたけれど、成人して社会人になってから締め切りに追われ、やりたいことが思うようにできなくなった。その現実気づいて、私は自分のやりたいことを忘れないために日

記をつけるようにした。唯織と付き合った期間だけつけていた。

「岡本さん、先週渡してくれたアイデア先方に送ったんだけど、すごく好評だったよ！」
デスクに座ってパソコンを立ち上げた時、課長から声を掛けられた。好評だったと言われ、私は舞い上がった。

「ほんとですか？ よかったです」

「岡本さんには期待しているからね、これからも昇格できるように頑張ってるね」

「はい、ありがとうございます」

私は笑顔で受け答えをし、デスクに体を戻す。デスクには唯織と二人で撮った写真を写真縦に入れて立てかけていた。彼が見守っていると思うと私は指輪と同様、どんなに辛い仕事も頑張れるような気がしていた。

「さっき聞いてたよ。昇格したんだってね」

見惚れていると、後ろの方から同期の佐田くんの嬉しそうな声が聞こえた。彼は唯織の同級生らしく、私自身は会社で知り合ったのだけれど、唯織と似ていて気さくに話しかけてくる人だった。「おめでどう」と嬉しそうに言う彼の口元に小さなえくぼができる。私はその彼の笑顔が好きだった。

「ありがとう」

写真立てを無意識に見ていたのか、私の顔を覗き込んでいた彼が「おっ」と何かに気づいたような声を出す。

「伏せてあった写真立てが元に戻ってる。何か進展あった？」

何か企むような顔をしながら私の顔を更に覗き込んでくる。

「いや、実は……」

昨日、偶然三年間音信不通だった彼と再会したということ伝えると、彼は「え、うそ！ それほんと?!」と目を見開いた。社内に彼の声が響いたせいで、視線が私と佐田さんに注目が集まる。すみませんと謝りながら、「昨日僕の言ったことが当たったね」と嬉しそうに笑った。

佐田くんにはいつも会社の愚痴から些細な出来事まで色んなことを聞いてもらっている。昨日も飲み連れ出し、愛用していたペンをなくしたと嘆いていた。それを彼は文句も言わず、ずっと聞いてくれていた。

「人生には必ず悪いことが起きた後に良いことが起きるようにできてるんだよ」

哲学者のようなことを口にして笑ってしまったけれど、たぶん実際そうだ。

「まさか岡本さんの前に現れるなんて、そんなことあるんだね。え、どう？ 復縁？ したの？」

「まあ、うん」

復縁はしたけれど、それを口にするのは恥ずかしかった。顔が熱くなっていくのを感じた。ああ、これが恋をしている時の感情だと改めて自覚して、少しだけ嬉しくなる。

「じゃあ、これから楽しくなりそうだね」

そうやって彼は嬉しそうに笑った。

恋人がいるというのは、心の支えになる。三年前、突然連絡が取れなくなりそこから一人で過ごしていたけれど、やっぱり恋人が居るといふ事実は私を安心させてくれる。

唯織に再会した翌日、彼と二人でデートをしようと三日後の休みに約束をした。彼の家は知らなかったけれど近くに住んでいるらしく、私達は駅前で集合することにした。一時間後に控えたデートの為に、私はタンスの中から眠らせていた白いワンピースを引っ張り出して、袖を通した。いつもはスーツという堅苦しい身動きの取りづらい服装をしているので、洋服一枚でお出掛け用の服になるということに感動を覚えた。

仕事の時なら絶対に履かないサンダルのハイヒールを履いて、外に出る。熱い、とはまた少し違うが、梅雨が近づいている空は灰色に染まっていた。

午後一時、約束の駅前に行くと、彼はスマホをいじっていた。

「おまたせ」

顔を覗き込みながら手を振ると、彼はびっくりしたような顔をした。三年ぶりに見た彼女の姿に驚いているのだろうか。それはそれで、すごく嬉しい。

「さっき調べてたんだけどさ」

そう言いながら、唯織は私にスマホを見せてきた。画面には近くの洋服屋の店舗名と服が表示されていた。

「昼なのに服を買うの？」

「いや、確か服好きだったでしょ？」

なぜか歯切れの悪い彼に「そうだけど」と答える。でも私が今やりたいのは唯織と一緒にご飯を食べることだ。

「せっかくだから、ご飯食べようよ」

少し納得がいかないような感じで、でもそんなことは口に出さず「そうだね」と言った。

「久しぶりに一緒に食べたくないの？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど」

「じゃあ行こうよ」

私は唯織の手を取って歩き始めた。彼の手は少しだけ冷たくて、火照っていた私の手にちょうどよかった。

いつも歩いている道のりでも、好きな人が隣にいるというだけで世界が輝いて見える。

そんなことを感じるができる感性があるということに、私は密かに喜びを感じていた。

「ねえ、ここ入ろうよ」

適当に街を歩いていると、オムライス屋を見つけた。エミの軒と書かれたそのお店は、昭和を感じさせるようなレトロな雰囲気のお店だった。オムライスは唯織が好物だった食べ物で、三年前はよくこの店でオムライスを食べていた。オムライスを食べれば機嫌がよくなるかもしれない。そう思った私は「うん、食べよう」と賛成をしてくれた彼の手を引いてお店の中に入った。

一名様ですかと店員さんに訊ねられ、私は「二名です」と答える。すると不思議そうな顔をして窓側の席に案内された。

席に座り、メニュー表を取り出すと唯織も顔を覗き込んだ。メニューを選ぶふりをしながら彼の顔を見ると「懐かしい」と言いながら笑っていた。

「何にする？」

「俺はいらない。お腹減ってないし」

「今、懐かしいって言ったのに？」

「うん」

俺は眺めてるだけでいいよと言っていたけれど、少しくらい食べたほうがいいよと私が背中を押した。すると「じゃあ、これにする」と来る度に頼んでいたデミグラスソースのかかったオムライスを指さした。

「じゃあ、私もそれにする」

恋人同士だから同じ物を食べるというルールはなかったが、私はどうしても彼と同じものを食べたかった。ベルを押して店員さんを呼び、「オムライスを二つください」と注文す

る。席を案内した髪を結んだ女性の人ではなく、男性の人だったけれど、「二つですか？」とまた不思議そうな顔をされた。二人いるんだから、二つ頼むのは当たり前なのにどうしてだろう。

「二つで大丈夫です」

少しだけ強く言うと、店員さんは「分かりました」と言って店の奥に戻って行った。

「ねえ、俺頼んでよかったの？」

店員さんが居なくなっただけ、心配そうに私の顔を見た。

「いいよ、私が払うし。唯織は心配しなくていいよ」

「……分かった」

三年前のデートはこんなに暗かっただろうか。三年前はもっと明るくて、楽しかったような気がする。でも今はどうしてか唯織が私に気を使っている。私自身もなくなった指輪のことも、どうして音信不通になったのかも聞けないまま、お互いに何かを隠しているような、そんな感覚がある。どうして素直になれないのだろうか。

もやもやとした感情を抱いていると、「おまたせしました」と二つのオムライスが運ばれてきた。

「わあー、美味しそうだね」

彼の顔を見ながらそう呟いてみたけれど、唯織はあまり嬉しくなさそうに「そうだね」と頷くだけだった。

「それよりさ、なんか視線感じない？」

手を合わせオムライスを食べていると、向かいに座っている唯織が気まずそうに私の顔を見た。彼もオムライスを頬張っているけれど、あまり楽しくなさそうに見える。

「別に、何も特に変わらないけど」

「……そう」

何か言いたげな顔をして、再び彼はオムライスに口を運ぶ。

大好きな食べ物のはずなのに、どうして唯織はそんなに楽しくなさそうな顔をするのだろうか。アクセントの為に添えられたデミグラスソースは、少しだけ甘ったるく感じた。

「最近、仕事場の人が冷たいんだけどさあ」

夜中の二時、愚痴を聞いてもらおうと思い、唯織に電話をかけた。本当なら電話ではな

くLINEでもよかったんだけど、いつまでも既読がつかないので電話をすると「もしもし」といつもの声が聞こえた。

「なんで冷たいって感じるの？」

電話口で彼は優しく私に問いかけた。唯織は私が何かを相談した時真正面から意見を言ってくるのではなく、私自身がどうしてそう思っているのかを聞き出して、その上でアドバイスしてくれる。それが私が好きな彼の一つの長所だ。

「別に何かされたっていうわけじゃないんだけど、前とは違う感じがするの」

「具体的には？」

再び聞いてくる彼に、私はこの前のことを思い出す。

「仕事は引き受けてくれるんだけど、対応が少し冷たいっていうか……」

「仕事には支障をきたしてるわけじゃないんだよね？」

「まあ、そうなんだけど」

「なら、別に大丈夫だと思うよ。その時の機嫌ってあるだろうし」

「そう、だね」

確かに彼の言うことは正論だ。確かに最近の私は彼氏ができて浮かれていて、別にそれを言いふらしたわけでもないけれど、影で嫉妬されていたのかもしれない。そう考えると少しだけ気が楽になった。

「ずっと気になってたんだけどさ」

会話が一区切りして、私は唯織にあることを訊ねる。

「夜中の二時から四時までの間でしか返信がないのはどうして？」

付き合い始めた時はそこまで気にしていなかったけれど、再会して再び話すようになってからずっと気になっていたことだった。現に今も返信がなくて今こうして電話をしている。

「なんでって、忙しいからだよ」

「忙しいって何が？」

珍しく言葉を濁す唯織に、今度は私が訊ねる。スマホを握っている右手に力が入る。

「俺だって仕事してるんだよ」

「それでも休憩時間ってあるでしょ？ 返せなくても見ることはできるでしょ？」

「でもタイミングってあるじゃん」

唯織は呆れたようにため息をついた。それに私は苛ついていく。

「それが遅すぎるんだって。夜中の二時なんてまず起きてないから。なに、じゃあ私が毎日意見を聞くことができる二時まで待たないといけないの？」

「別に起きとけとは言っていないじゃん」

「じゃあ、なんで返信ができないの？もしかしてあの時みたいに浮気してるの？だから日中に返せないの？」

疑いだしたら止まらなかつた。あの時みたいな感情に苛まれるのだけは嫌だつた。

「佳澄は俺と一緒に時間を過ごしたいの？」

質問に質問で返され、私は思わず黙り込んでしまう。突然の告白をして、どうしたいのだろうか。

「……一緒に居たくないかと言えば嘘になるけど」

「じゃあ、同棲する？」

「なに、急に」

彼が言っていることが理解できなかった。返信を二時から四時までの間しか返せないのは嫌だ。すなわちメッセージをするということは同意を求めているということで、電話をするということは一緒に居たいから、と考えたからなのだろうか。

黙って唯織の返事を待っていると、「実はあの時」と喧嘩の原因になった事を話し始めた。

「俺の家にドライフラワーや香水があつたのは、佳澄にプレゼントするためのもので、誰かにあげるつもりじゃなかつた」

勘違いさせてごめん、と弱々しく唯織は謝つた。

「いいよ、別に引き摺ってないし」

そう私が伝えると、彼は「よかつた」と言った。

「本当に同棲ってするの？」

「うん、するけど。なんで？」

「いや、なんか怒った勢いで言ったのかつて思って」

「そんなわけないじゃん」

電話口で彼は照れるように笑つた。「どうして言った側が照れるの？」と私がツッコむと「照れてないよ、おかしいんだよ」とよく分からないことを口にした。

「いつから同棲始めるつもりなの？」

そう訊ねると、「半年先くらいかな」と遠くを眺めるような声で言った。

今日はもう遅いからまた今度、と言われ電話を切った。

その同棲の話し合いはできるだけ会って話し合いたいからと、その電話を境に私達は以前よりも会う回数が増えていった。同棲するための部屋を契約し、それぞれに準備を始めた。

「楽しみだね」

いよいよ前日に迫った同棲生活は、もうすぐそこにあつた。あの日がきっかけで日中にも関わらず出てくれるようになった。早まる楽しみを抑えきれず電話をし訊ねると、彼も「そうだね」と嬉しそうに笑っていた。

それなのに当日になると、唯織は約束の場所に現れなかった。スマホが唯織の携帯番号に繋がらない。何度掛け直してみても結果は同じで、私はただ焦るばかりだった。結局彼は私の前に現れることなく、無駄に一人分広い部屋で過ごすことになった。

目の前には女物の香水や、壁に吊るされたドライフラワーが飾られている。部屋の中も柑橘系の香りがして、これを浮気していると言わなければ何と言うのだろうか。

「なにこの香水と花！ 日常的に女を家に呼んでたってわけ？」

「いや、だから違うって。これは佳澄の為に――」

「そんな分かりやい嘘いらなから！ ねえ、浮気してたんでしょ？」

部屋の中に私と怒鳴る声と、戸惑っている弱々しい唯織の声が部屋に響く。

私が気分で唯織の部屋に訪れるのは割とよくある話で、彼は私のその性格を理解してはたはずだ。それなのに、部屋には隠すどころかむしろ目立つところにドライフラワーや香水、指輪が置かれている。それがどうしようもなく私の虫の居所を悪くした。どうして唯織は浮気を認めないんだろう。

「だからしてないって」

彼も自分の意見を認めてもらえないからか、彼の声も次第に大きくなっていく。

「じゃあ、してない証拠を見せてよ！ 見せられないでしょ？ それが浮気してるって証拠だよ！ 私はずっと唯織のこと信じてたのに！」

どうしたらいいか分からなかった。ただ存在していたのは彼に対する怒りと悲しみだけで、それをうまく言葉に出来なかった。

私は唯織にただ抱きしめてもらってほしくて、家を飛び出した。行き場のない気持ちとほんの少しの下心を抱きながら、私は夜の道をただ夢中に走った。「ちょっと！」と叫ぶ声とドアの開閉音、足音で彼は私に追いつこうと走っているのが振り向かなくても予想できた。私も彼の仕返しとしてナンパされたと嘘をついて知らない男と一夜を越してやろうかと、頬に流れる涙を感じながら思う。

今夜は熱帯夜だという予報は当たっていて、外は蒸し暑かった。ドラマなら、寂しさを表現するために冬に設定すると思うけれど、私にはそんなドラマチックなことができる程できる女じゃない。第一、空から降ってくる雪に幻想的だと思ったことは一度もない。背中に汗が流れたのを感じた時、後ろから手を引っ張られ、途端に温かいものが私を包み込んだ。それが唯織が私を抱いたことだと気付くのに時間は掛からなかった。

「どこ行くんだよ！」

いつもは温厚でぼんやりと過ごしている彼が、珍しく私の為に声を荒げている。息を整えながら話す唯織に、私はこんな声も出せるんだとよく分からないことを考える。

「どこでもいいでしょ！ 私はとにかくあなたから離れたいのよ！ 触らないで！」

私は抱きしめている彼の腕を振りほどいて、再び走り出す。

何かの本で体と心は繋がっているということを読んだけど、あんなの嘘だ。本当に愛しいと感じた時、怒りに震えた時の感情は裏腹なのだ。女はいつも感情とは真逆の感情を抱いて愛する人と接している。その本を書いた著者は、まだ恋愛のことは分かっていないと、声を大にして言いたい。

「佳澄、ちょっと待て！」

今更私の名前を呼んだって、私は振り返ったりしない。唯織はいま私に触れようと手を伸ばしているだろうが、そんなこと知らない。そうやって自分の犯した罪を一生抱えて生きていけばいい。そう思ったのに。

「危ない！」

そう叫んで、彼は私の背中を押した。その直後、大きなクラクションが鳴り響き、横を見るとただ白い世界がそこに存在していた。その時、その光が車のライトで、初めてここが信号だということに気が付いた。

すぐ後ろで何かがぶつかる衝撃音が聞こえて、私はすぐに唯織が車にぶつかったのだと理解して、振り向く。彼は数メートル先において、倒れたまま立ち上がろうとしていない。

「唯織！」

私は彼に駆け寄る。トラックのライトで照らされた彼の頬にはかすり傷がついていて、頭から血を流していた。

朝になると、私は毎回泣いていた。亡くなった直後はあんな夢見なかったのに、どうして今になってこんな夢を見るんだろう。ずっと目を背けていた現実が、目の前に立ちはだかっている。その事実には私は耐えきれそうになかった。

「最近、元気ないけどなんかあった？」

そんな異変に気付いてくれるのはやっぱりいつも飲みに誘う佐田くんだった。同棲を約束していた唯織と音信不通になったこと。私が見ていたのは生きていた唯織ではなく、幽霊だったこと。その話を伝えると、佐田くんはいつものように飲みに連れて行ってくれた。

「そっか。幽霊だったのは最初から気付いてたんだ」

怒るわけでも否定するわけでもなく、ただ肯定してくれた。そんなところが唯織と似ている、少しだけ泣きそうになる。

「もし私があの時、飛び出してなければ唯織は死なずにすんだわけで。それがずっと申し訳なくて。会えるはずもない彼に会ったら埋められなかった三年間を埋めることができるんじゃないかって思ってた」

唯織に対する思いを言葉にするだけで、涙で目の前が滲む。

「幽霊って未練でこの世界に残ってるっていうからさ、きっと何か原因はあるはずなんだよね。それが音信不通になった原因に繋がるかは分からないけど」

もし仮に原因が分かったとして、それを解消した場合、もう私は二度と唯織に会うことはできない。それは絶対に嫌だった。

「岡本さんの言動にも原因があるかもしれないから、よく思い出してみてよ。分からなかったら僕も相談に乗るからさ」

「ありがとう」

そうやって佐田くと別れて出てきたけれど、相談なんてできるわけがない。これは恋人同士二人の問題で、佐田くんは関係ないし巻き込みたくもない。

家に帰って一人分余計にあるソファに倒れ込む。その時ふと床にカツンと金属音が響く音がした。指先を見ると、薬指に指輪がはめられている。これは唯織と付き合っただけの指輪を彼が亡くなった後も片時も離さず身に着けていた。飲み会で言い寄られた時、この指輪をはめていれば嘘でも「結婚してるんです」ということができた。そして何より、居なくなった彼が私を守ろうとしてくれているような気がした。でも気がするだけで、私はただ唯織が居ない現実と向き合いたくないだけなのかもしれない。

数日経っても、唯織は現れることはなく、一カ月が経とうとしていた。ふと壁に掛けているカレンダーを見ると、明日は海の日らしい。そして付き合ってから四年記念日でもあった。もういつそ彼に会うことができないうら、せめてもの償いで海に行こうか。なんてそんなことを考える。海に行ったからと言って別に自ら命を絶つ予定もないし、もしそうした場合は彼に一生会えないような気がするから嫌だ。ただ告白されたあの海で、私は風に当たりたかった。

時計を見ると午後十一時を回ったところだった。今から車を走らせれば早朝の五時くらいには着くだろう。そうと決まれば、あとは車に乗り込んで走らせるだけだった。車のドアを開けて夜風を浴びる。それだけのことがどうしてか愛おしく思えて、私はどうしてこうも自分の中の概念に囚われたままなのだろうと思う。明日は仕事だけれど、今日くらいは風邪を引いたと言っても問題はないだろう。

私の予想は当たり、海岸に着いたのは夜明け前だった。駐車場に止めて、車を降りると、潮風がそっと通り過ぎて行った。深呼吸をしながら海岸へ降りていくと、白いTシャツとジーパンを履いている唯織を見つけた。

「唯織！」

私は思わず彼の名前を叫んだ。人が居れば注目を浴びたかもしれないけれど、早朝だったので人はそこまで居なかった。

「佳澄」

近づくと、彼は小さく私の名前を呼んだ。生きていて何度も呼ばれたはずなのに、彼に

その言葉を口にされると、どうしても泣きそうになってしまう。

「気付いてたよね、俺が幽霊だってこと」

目の前に立った唯織は、優しく私に訊ねる。私は首を縦に動かして同意する。私は彼が幽霊だということを知っていた。

「どうして俺と付き合ってくれたの？」

でもそれを見て見ぬふりをして、過ごしていた理由。そんなの一つしかない。

「幽霊でも私の前に存在してくれているのなら、またあの時と同じように過ごせると思ったの」

羽目を外せば、私はまたあの時と同じように、感情とは違う言葉を吐き出して暴れてしまう。そんなことは目に見えていたから、私は息をできるだけだけいつもより多く吸う。

「幽霊ってさ、この世に未練があるから現れるって言うけどさ、俺がなんで佳澄の前に現れたか分かる？」

こういう大事な話をする時でも冷静さを忘れずに言葉を発する彼が本当に好きだった。分からないと答えると、彼は目を左薬指に目を移した。

「その指輪を外してほしいんだよ」

分かっていたことだった。でも、ペアリングであるこの指輪を外したら、もう二度と彼のことを思い出せないような気がして怖かった。だからずっと外せずに居た。

「嫌だよ」

私がそう言うと、唯織は「なんで？」と訊いてきた。そんなこと言わなくても分かるはずなのに、敢えて聞くのは私に存在している感情と向き合ってほしいからだ。思わず、手に力が入る。

「だって、私は唯織のことをずっと忘れたくないの。唯織がこの世界から居なくなっても、この指輪さえあれば傍に居てくれる気がするの。あの時、救うことができなかったけど、これさえあれば、私はどんな困難も乗り越えられる気がする」

目の前が涙で歪んでしまい、彼のいまどんな顔をしているのかが分からない。指輪を外すということは、彼との別れを意味する。唯織にもう二度と会えないのは、耐えられそうにない。今だって事故の時を夢に見て泣いているっていうのに、会えなくなったその日から私はどれだけの涙を流してもその悲しみから抜け出せる自信はなかった。

「これ、桜貝って言うんだ」

突然、彼は手のひらに乗った小さな貝殻を見せてきた。私はそれを手に取って空にかざして見ると、桜の花びらのように淡いピンク色に変わった。その色の美しさに、私は思わず見惚れてしまう。

「桜貝は『幸せを呼ぶ貝』って呼ばれているんだ。見つけたら幸せになれるって言われている」

貝を見ている私の横で、唯織はもうひとつの桜貝を見ながら由来を教えてくださいました。

「だからって言うわけじゃないんだけど、連絡が取れなくなったのは桜貝を探してたからなんだ」

鼻の下をさすりながら恥ずかしそうに言う彼に、私は思わず「なにそれ」と笑いながらツッコんでしまう。それを見て、唯織もまた笑う。

「佳澄には幸せになってほしいんだ」

少しだけ自由なその理由に思わず笑ってしまったけれど、彼の真っ直ぐと見つめる瞳を見つめていると、本気なんだと思った。

「本当は晃仁あきひとの好意に気付いてるでしょ？」

唐突に訊ねてきた彼に、思わず心臓が跳ね上がる。

無理やり私の話を聞かせるために飲みに連れ出したとはいえ、佐田くんは嫌な顔一つせず私の話を聞いてくれた。唯織が居なくなった時でさえ、私は彼に助けを求めていた。片想いしている人に彼氏が居て、なのにその人はもうこの世界には居ない幽霊で、どうしたら会えるかなんて相談を持ち掛けられて、耐えられるはずがない。それなのに彼はずっと私の話を聞いてくれた。どんな時にでも笑顔でいた彼は、きっと私が辛くならないように行動と笑顔で私を支えてくれていたのだ。

「ここには居ない俺に愛を継ぐより、ちゃんとここに存在してしっかりと佳澄と向き合ってくれる晃仁と付き合っしてほしいんだ」

その言葉に思わず涙が零れ落ちてしまう。言葉の代わりに溢れ出す涙に「まだ泣くのは早いよ」と右手で涙を拭いながら唯織に笑われる。そんなことを言うなんて、別れ際に泣いてほしいと言っているようなものだ。そう思うと途端におかしくなって笑ってしまう。最後の最後まで彼に振り回されてばかりだ。いや、振り回されていたのは唯織や佐田くんなのかもしれない。

「指輪、外してくれる？」

涙と笑いがある程度収まった後、彼は再び私に訊ねた。彼ともう二度と会えないのは辛
いけれど、唯織の願いは私が佐田さんと幸せになることだ。私達が付き合うことによって
彼の願いが叶うなら、これ以上の幸せはない。

「うん」

唯織の目を見ながら、私は頷く。震える右手を指輪をはめている左薬指にあてる。海風
に当たっていたせいか、三年も肌身離さず付けていた指輪は思ったよりも冷たかった。

「最後にお互いの名前を呼び合おうよ」

どうしても勇気が出なかった私は、指輪を見つめていた彼に提案する。なんで、と笑わ
れると思っていたが、唯織も同じことを考えていたのか「うん」と頷いてくれた。私が彼
の名前を呼ぶのはもうこれで最後だと、彼の発する声とその姿に意識を集中させる。

「唯織」

「佳澄」

私の名前を呼んだ彼は、今まで見てきた中でいちばん優しい顔をしていた。私も精一杯
の笑顔を作っているけれど、うまく笑えている気がしなかった。今更、見つめ合うのが恥
ずかしくなって、私は鼻を触りながら俯く。

「じゃあ、指輪外すね」

そう言って私は再び右手の親指、人差し指、中指で左薬指にはめられた指輪に触れる。
ほんの少しの力を入れて指輪を動かすと、すぐに指輪を抜くことができた。目の前にいる
彼を見ると、目の前の景色が透けて見えるほどになっていた。

忘れることが怖いと言ってこの指輪に執着していたけれど、意外と簡単に手放すことが
できるんだと、今やっと実感した。彼が贈ってくれた物がある限り、たとえ目の前に現れ
ることができなくなっても自分の中で生き続けることができる。そんなことにもっと早く
気が付けていたら、唯織を苦しめることはなかったのかもしれない。

「佳澄、幸せになってね」

その言葉と同時に温かい何かに包まれた。それが唯織が抱きしめているということに気
付いた時には、再び涙が溢れ出していた。やめてよと口に出そうとしたが、その言葉は飲
み込んだ。二度目の別れの言葉に、否定する言葉なんて存在してはいけない。私は彼を、
唯織を幸せな状態で成仏させると決めたのだから。

「ありがとう」

その言葉に相応しいのは、きっと感謝する言葉だろう。彼が居なくなったこの世界に残ったのは、手に握られた幸せを呼ぶ二つの桜貝と浜辺に落ちた灰色の指輪だけだった。

「この子の名前は何にする？」

左側を歩く晃仁に訊ねる。彼は「まだ性別が分からないから、決めたってしようがないよ」と言って笑った。

「でも早めの方がたくさん候補も出ていいと思うんだけど」

「そんな焦らなくてもゆっくり決めていけばいいじゃん」

そう微笑んで右手を差し出す彼に、私は手を握った。私達を繋いだその両腕には幸せを呼ぶ桜貝が付けられていた。